

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 158, 2012

VIEW 展望

「枠を超えて」—ドイツでの映画研究／足立ラーベ加代…2

INFORMATION 学会組織活動報告

機関誌編集委員会…3 総務委員会…3 研究企画委員会…8 映像表現研究会…3
支部・研究会だより 東部支部…3 関西支部…5 西部支部…5 中部支部…6-7
日本映像学会第38回大会実行委員会からのお知らせ…8

REPORT 報告

東部支部第3回講演会「映画批評は可能か？」波多野哲朗氏／田島良一…4

FROM THE EDITORS

編集後記…8

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第158号」2012年4月1日発行
発行人：豊原正智 編集担当／総務委員会：岡島尚志(委員長)・古賀太(副委員長)・
岩本憲児・応雄・橋本英治・山田幸平・和田伸一郎・奥野邦利

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

「枠を超えて」ードイツでの映画研究

足立 ラーベ 加代

最近、研究仲間の間でよく話題になるのが、まだ純粋に「映画学」を研究している人はどれくらいいるのだろうか、ということだ。

ドイツの映画学は、元々演劇学や文学から派生したものであったが、今ではほとんど、メディア学という枠に収められるようになってきた。第一世代を担った先生方が、近年次々と定年を迎え、世代が交替していることも変化に拍車をかけている。コンピューター時代において、メディア学はたいへんな勢いで発展し、映画学はその一部として吸収されてしまった。その上、シネマの時代が今や本当に終わりを告げようとしており、世界中の映画研究者は皆そうであろうが、デジタル時代のポストシネマをどう論じるか、頭を切り替えなければならない。毎晩のように通えるような名画座も今ではもう残り少ない。また、ここ数年で、ドイツの良き伝統であった、学生が初めから修士（マスター）を目指して勉強する、鷹揚な大学制度が廃止され、アメリカや日本式の学士（バachelor）制度が導入された。世界中の大学との提携と、卒業、就職をスムーズにするためである。学生たちはできるだけ役に立つ知識を身につけて、所定の単位を取得し、4年程で卒業しなければならない。結果として、昔のように、何年も、興味の赴くままに抽象的な芸術論を追い求めることは難しくなった。

映画学の今後の展開に不安材料は多くあるのだが、いつの世にも素晴らしい映画を創る作家は多く輩出するし、鋭い研究者、見る目のある観客も大勢いる、という楽観主義に議論はいつも落ち着く。ここでは、現時点でのドイツの映画研究の状況について、筆者が身近に見聞きした範囲でご報告をしたい。

昨年10月ポツダム市で行われたドイツ・メディア学会定例会議では、4日間に8セッションのパネルが5組に分けて平行して行われた。ゆうに130人の発表者が登壇し、数百人の聴衆が詰め掛ける、一大研究見本市となった。

テーマは「機能障害」。歴代コンピューターのオペレーティングシステムを比較した研究や、コンピューターゲームの展開とそれを妨害するファクターの相互関係性、ひいては、フィットネス機器のコミュニケーション機能の分析など、いかにも時代の先端を行っている。電子工学的な専門性の高い話題なのだが、映像分析にも使えそうな気がした。そのまま映画化できそうな、巧みなプレゼンテーションもあった。

純粋に映画についての講演は、よく探さなければ見つけにくいくらい少なかったが、影が薄いというわけではなかった。映画というメディアを自ら批判する実験映画、カメラアイの限界や、従来の映画的話法の破綻を積極的に晒す、いわゆるベルリン派と呼ばれる作家たちの作品を分析した発表など、重厚な論考が揃っていた。生き生きとした映像体験は、正常な知覚のプロセスに異化作用を与えるという、面白い問題提起もあった。それに直接リンクしたのが、移動撮影、ズーム、フラッシュ・フレーム、照明などの映画の技法を、一種の知覚の攪乱機能として、個別に分析したパネルだった。映画をメディアとして研

究するとは、こういうことなのだ、と気づかせられる。映画の表現の可能性を詳細に見直すことで、再発見できることがまだまだありそうだ。

印象的だったのは、映像のデジタル化は実質的に、何も新しい表現をもたらさなかったのではないかと、というディスカッションだった。思い返すと、映画の黎明期の数々の発明は真に革命的だった、という意見に頷く人が多かった。それでも、ポストシネマ論争は様々なプロジェクトの中で白熱していて目が離せない。いずれにせよ、この過渡期に、もう一度初期シネマを振り返ることは、有意義なことだろう。また、どの発表も、堅固な理論に基づいていて聴き応えがあり、メディア学の中での映画学は、確実に進化していると思わせた。ルドルフ・アルンハイムが唱えた「芸術としての映画」はメディア美学としての映画研究として、しっかり根付いている。また、ファスビンダーの死後初めて、素晴らしい充実期を迎えた現代ドイツ映画の中にも、その精神が漲っている。

話題は変わるが、ドイツにおける日本映画の研究も最近はやや変化してきている。以前、日本映画研究というと、エキゾチックな特殊部門のように扱われてきた。しかし今や、近隣の先進の監督たちの目覚ましい活躍のお陰で、アジア映画はもはや辺境文化ではなくなった。レクラム出版の映画部門から、今年「アジア・ニュー・ウェイブス」という一冊が編纂される。目次を見て驚いた。日本、香港、台湾、中国、韓国、タイの映画が総計50本並んでいるのだが、メジャー作品を敢えて避けたマニアックなラインナップになっている。また、執筆者にアジア映画の専門家はほとんどない。先入観抜きで映画研究者の視点からアジア映画を観るという立場を優先しているようだ。出来上がりが楽しみである。

筆者は映画学の仲間たちと共に、日本とヨーロッパの映画を比較する学会を立ち上げ、その第2弾の準備に入ったところだ。参加者たちは日本映画に興味を持つドイツ語圏の映画研究者、日本学者、美術史、哲学研究者らで、多角的なアプローチを見せてくれる。次回学会は2013年1月フランクフルト・アム・マインで開催する予定だ。テーマは「日本映画における身体」。この欄をお借りして、日本の研究者の方々をお願いしたいのだが、私共の学会に参加をしたいという方がいらっしゃれば、是非名乗りを挙げていただきたい。（英語通訳可能）

ドイツの映画研究が、メディア学という新しいカテゴリーで新たな展開を見せていること、そして日本映画研究も、異文化研究の枠から抜け出して、メディア学、そして映画学の中で育って行く状況はなかなかよいものではないだろうか。「枠を超えて」とは、エイゼンシュテインが言った言葉だが、まさにそんなイメージで展開する、ドイツの映画研究の新たなダイナミズムに期待をしていただきたい。

（あだち らーべ かよ/デュッセルドルフ大学日本学科教授代理、イェーナ大学メディアの歴史と美学講座非常勤講師）

機関誌編集委員会報告

「ICONICS」電子版準備委員会代表 加藤哲弘
「映像学」編集委員会委員長 村山匡一郎

「ICONICS」電子版のお知らせ

学会誌国際版「ICONICS」の電子版への移行についてお知らせいたします。今期編集委員会では「ICONICS」電子版準備委員会を立ち上げて検討してきましたが、その概要が固まりましたので以下にご報告します。

①「ICONICS」電子版の刊行は2014年3月末とする。今のところ紙媒体での刊行と同様に2年毎の刊行を予定。

②招待論文は考えずに海外委員という名称は外す。「ICONICS」の刊行が10号を数え、20年前の状況と大きく異なってきたことを考慮して、海外からの招待論文以上に、会員の論文を海外に発信することで国際交流を促進する。

③翻訳論文は複数本取り上げる。これまで「ICONICS」が2年おきに刊行されるまでの『映像学』4号分から査読委員会の検討を経て翻訳論文を1本選んできたが、それを複数本選ぶ方向にする。ただし選択本数は査読委員会の検討次第とする。

④翻訳論文のネイティブチェックに関して未就職の若手会員には経済的に優遇する。

⑤査読委員会は紙媒体による刊行と同様に「ICONICS」編集委員会に所属する。

⑥締切りとスケジュールは以下のとおり。

2012年12月末：翻訳論文の決定→欧文原稿の執筆

2013年6月末：欧文原稿の締切り（翻訳論文と投稿論文、ともにネイティブチェック済み）

2013年7月～：査読と修正

2013年9月末：完全原稿の入稿

2014年2月末：PDF原稿の作成

2014年3月末：オンライン刊行

以上が概要ですが、スケジュールは余裕を持って組んであります。また海外留学経験のある若手会員に編集委員として参加してもらおう案などがありますが、次期「ICONICS」編集委員会において具体的に決定したいと思います。

（かとう てつひろ／関西学院大学、
むらやま きょういちろう／多摩美術大学）

総務委員会報告

副委員長 古賀 太

これまでお知らせした通り、役員再任に関する内規が改定されました。該当会員には既にお伺いの文書を送付し、返事をいただいております。役員満了に伴う選挙の投票用紙は4月15日以降に送付しますので、くれぐれも棄権されることのないよう、投票をお願いします。締切りは5月11日（金）必着です。また今回は内規の改定により被選挙権のない方が増えますので、ご注意ください。

なお選挙管理委員は前回の会報にお知らせした11名ですが、委員長を武田潔会員とすることが理事会で承認されましたので、併せてお知らせします。

また、このたび映像学会と事務局の間で、正式に業務委任契約を結ぶことが理事会で承認されましたこともお知らせいたします。

（こが ふとし／日本大学芸術学部）

映像表現研究会

代表 伊奈 新祐

<報告と計画について>

次期大会を開催する九州大学において、昨年同様に「ISMIE2011（インターリンク：学生映像作品展2011）の学生作品選抜集」を発表できればと思っております。3月現在、各参加校の教員による投票のための代表作WEBサイトの最終調整段階にあります。新年度が始まるまでに選考を完了できることを願っております。参加校の先生方のご協力、よろしくお願い致します。またできれば大会において「研究会によるパネル」を計画できればと思っています。大会参加予定の研究会メンバーからの「テーマの提案」を期待します。

「ISMIE2012」の会場は、例年の京都と東京になりますが、東京会場はオペラシティータワーから「銀座のアップルストア」へ変更となる予定です。アクセスが良くなり多くの学生や会員諸氏にご覧いただける環境となることを願っております。同時に上映会（および研究会）運営についても研究会事務局（担当：奥野）である日大だけではなく、参加大学間で役割分担など相互に協力していただければ幸いです。

京都および東京上映会以後の「ISMIE2011 学生作品集」の巡回上映会については、1月20日～30日まで名古屋学芸大学のギャラリー（NUAS GalleryB）にて実施されました。引き続き巡回上映を希望される支部あるいは大学があれば、研究会事務局までお知らせ下さい。

（いな しんすけ／京都精華大学芸術学部）

支部・研究会だより 東部支部

田島 良一

東部支部総会開催のお知らせ

下記の如く第38回全国大会開催期間中に平成24年度東部支部総会を開催いたします。

何卒お繰り合わせの上、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時 2012年6月3日（日）
第39回通常総会後

会場 九州大学 大橋キャンパス
会場アクセスは、第38回大会第2通信および5月に発送される第39回通常総会開催通知をご参照下さい。

以上

（たじまりょういち／東部支部担当理事・日本大学芸術学部）

Image Arts and Sciences 158 (2012) 4
 東部支部第3回講演会／波多野哲朗氏 [2011年11月26日・日本大学藝術学部]

「映画批評は可能か？」報告

田島 良一

日本映像学会東部支部では支部所属の5つの研究会合同による第3回東部支部講演会を昨年の11月26日に日本大学芸術学部江古田校舎棟E301教室に於いて開催した。講演者は元日本映像学会会長で、現在、当学会の常任理事でもある東京造形大学名誉教授の波多野哲朗氏。



この20年の間に映画批評誌がつぎつぎと姿を消し、映画批評がいま未曾有の危機を迎えているとの認識から、「映画批評は可能か？」と題して、長年、批評活動に携わってこられた同氏に講演をお願いした。以下は講演の要旨である。

いま、映画をめぐる情報、映画レビューは増えつつあるが、その一方で映画批評は衰退の一途をたどっている。今回の講演タイトルはこうした危機意識を反映している。また、近年多くの大学に映画の講座が置かれるようになって映画の研究者は増えているが、そうした人たちが映画批評に関心を持つかと言えば大いに疑わしい。そもそも批評と研究とはその目的も機能も異なる。

映画批評とは何かという問題意識を抱くようになったのは、『現代日本映画論大系』（冬樹社 1970～72年）の編纂をした時にはじまる。かずかずの映画批評を読み続けるという作業の中で、映画批評には映画の流れとは異なる独自の流れがあることを発見した。映画批評は映画受容の一形式であるが、映画批評には同時代の批評家たちの映画に対する眼差しの在りようが表れている。しかし戦後25年間の日本の映画批評の流れをたどるなかで、批評主体の眼差しがたえず外的な要因によって揺れ動き、そこに一貫した主体の姿が見えてはこなかった。そしてそれから40年後の今日においてもなお、その尾を引きずっているように見える。昨今の映画批評の衰退もさることながら、こうした事態に何らの危機感も抱くことのない批評状況の中では、批評それ自体を対象化するというメタ批評的観点などはもう二度と現れないだろうと諦めはじめた。しかし日本の映画批評の問題を、1910年代から現在に至るほぼ90年の映画批評史という射程の中で捉え返したアーロン・ジェローの論文「映画の批評的な受容 日本映画評論小史」（『日本映画史叢書④』所収、森話社 2011年）が出現したことに驚き、かつ勇気づけられたのだ。論文は日本の戦後の映画批評の流れは、すでに戦前にその種が蒔かれていたと指摘する。ここで注目したのは、日本の映画批評のはじまりとなった帰山教正らの純映画劇運動の批評家たちが、その映画批評の根拠を西洋の理論に置いたという指摘である。そして、彼らは、映画批評家は映画の学識者でなければならず、同時に映画に対しては献身的な「愛活家」でなければならないと強く主張していた。こうした一種の知的エリート主義が、戦前戦後の映画批評を支配してきたというのである。

日本における映画批評の主流はつねに印象批評であったと思う。戦後の映画批評は印象批評との闘いから出発した。「論壇的印象批評」と「イデオロギー批評」との論争は有名である。しかし、「イデオロギー批評」が依拠した「大衆」という概念は曖昧で、その理論的深化もないままに

1950年代の半ばには姿を消してしまった。しかし「論壇的印象批評」のヒエラルキーもまた崩壊しはじめる。映画の素人を自認する観客批評の口火をきったのは鶴見俊輔の「誤解する権利」で、以来映画批評における百家争鳴の時代がはじまった。そして60年代に入ると、映画批評は、質量ともに充実した時期を迎えて、多くの読者を集めた。『映画芸術』『映画評論』などでは、哲学者、詩人、小説家その他さまざまな文化ジャンルの人々が競って映画について語り始める。一方、大島渚、吉田喜重、松本俊夫ら「日本ヌーヴェルヴァーグ」の映画監督たちも活発な批評活動を展開した。彼らはそれぞれの方法で「作家主体」の問題を鋭く追及した。これによって観客による批評にも作家主義的視点が根を下ろす。

60年代の後半になると、『季刊フィルム』『シネマ69.70.71』『映画批評』など、本格的な映画批評誌が登場する。いずれも短命に終わったが、たとえば『シネマ』などは、はじめて観客における批評主体の問題に踏み込んでいる。しかし70年代に入ると、『ぴあ』『シネロード』など映画情報誌が全盛期を迎える中で、映画批評は衰退していく。

80年代には蓮實重彦編集の『季刊リュミエール』が創刊される。蓮實は映画テキストを現実にはむろんのこと、いかなる観念やイデオロギーにも還元することを拒否して、その方法として「表層批評」を宣言する。意味解釈によってテキストが支配的なイデオロギーに絡み取られることを回避するため、映画の表層に留まりながら映画の持つ多彩で自由な意味の広がりに着目する。この批評態度は、同時代の批評に多大な影響を与えた。ただその固有の批評は、他の批評の論理とどう関係づけられるかについて多くを語ってはいない。すなわち自己の批評の立ち位置に関しては、別の論理が介入することを拒否しているかに見える。それは**図らずもシネフィルの世界のフェティッシュな自己完結性を承認することになる**だろう。こうして皮肉にも、印象批評を超えようとしてきたはずの日本の映画批評が、伝統的印象批評の特権性とどこか似た相貌を呈してしまうのである。

ところで、映画批評の可能性はどこにあるのか？ それはまず何よりも映画テキストの多彩な意味の広がりを生きたこと、そしてなお新たな意味の生成の瞬間に立ち会いつづけることである。そのためにも、メタ批評的な視点は不可欠となる。批評の言説を眺める自らを問い続けなければならない。批評と批評との関係を検証することで、今日の映画批評の在り様が見えてくる。批評のモチベーションを持続するためにこそ、歴史的な視点、別の視点から考え直してみる作業は必要である。むろん映画批評が消滅することはない。



以上が講演の要旨である。波多野氏の講演は約2時間にわたって行われたが、その後、質疑応答の時間が持たれ、活発な意見の交換がなされた。参加者も学会員の他、大学院生や映画に関心を持つ一般の社会人も参加するなど盛況裡に閉会した。なお、この要旨は波多野氏にも目を通して頂いたが、文責は報告者にある。

(たじまりょういち／東部支部担当理事・日本大学藝術学部)

Image Arts and Sciences 158 (2012), 5
支部・研究会だより

関西支部

大橋 勝

<報告と計画について>

関西支部では、大阪芸術大学ほたるまちキャンパスで第64回研究会、支部総会を以下の要領で開催しました。

日程：平成23年12月17日（土）

会場：大阪芸術大学 ほたるまちキャンパス

研究発表1：大野一雄の「手」の動き——『ラ・アルヘンチーナ頌』『O氏の肖像』映像分析——

関西学院大学大学院 博士課程後期課程 藤田明史会員

研究発表2：北野武の映画における暴力の様相 - 映画『その男、凶暴につき』を中心に

大阪大学大学院文学研究科 博士後期課程2年 妻泰秀会員

藤田会員の発表は、二つの映像の分析を通じて、舞踏の創始者の一人である大野一雄（1906-2010）の身体表現の特に手の動き注目して考察を行なうものでした。映画『O氏の肖像』（1969、長野千秋監督作品）と舞台作品『ラ・アルヘンチーナ頌』（1977）の記録映像における大野の身振りを比較し、そこに見られる共通性を指摘しつつ、大野自身の言葉を手掛かりに解釈を試みています。その上で60年代末から70年代にかけての大野の空白期間を、その後の飛躍への準備期間と捉え、この期間に撮られた映像作品にはワークインプログレスの性格があるという解釈を与えています。

妻会員の発表は、北野武の監督デビュー作『その男、凶暴につき』（1989）で描写される暴力を、日本映画における暴力の様相と北野武の演出術の分析を通して解釈を試みるものでした。深作欣二監督『仁義なき戦い』（1973）を中心に日本映画における暴力表現を分析し、そこから北野映画における暴力の背景と独自性を浮き彫りにすることが試みられました。そして寡黙な主人公の放つ過剰な暴力は彼のコミュニケーションであり、映画における暴力の表現は対話の表現そのものであることが発表者によって指摘されました。

両発表とも具体的な資料をもとにした詳細かつ興味深い研究発表でした。質疑応答も活発に行われ、意義のある議論を持つことができましたと思います。

研究会終了後に支部総会が行われ、平成23年度事業報告、平成23年度会計報告、平成24年度事業計画案が承認されました。夜には近くのインド料理店で懇親会（忘年会）を行い、楽しいひとときをすごしました。

今後の活動計画としては、今号発行時には終了していますが、3月24日（土）に第65回研究会を宝塚大学にて開催します。研究題目は「映画と場所の変容—戦後日本映画における『郊外』を通じて」（田中晋平、大阪芸術大学大学院芸術研究科）と「ピンク映画の50年～ピンク映画は日本映画に何をもたらしたのか?」（沼田浩一、宝塚大学造形芸術学部メディア・デザイン学科）の2件です。

当番校、研究題目等は未定ですが、第66回研究会を5月に第67回を12月に開催する予定です。また恒例になりました第34回夏期映画ゼミナールを8月3日（金）～5日（日）の日程で関西セミナーハウスにて行う予定です。上映作品、テーマ等は現在検討中です。どちらも決まり次第お知らせしますので楽しみにお待ち下さい。

（おおはしまさる／関西支部担当理事・大阪芸術大学）

Image Arts and Sciences 158 (2012), 5
支部・研究会だより

西部支部

中村 滋延

西部支部からの報告は以下の通りです。

(1)
九州大学大学院芸術工学研究院を主催校とする大会の開催に向けて、実行委員会を以下のように開催した。（開催日と場所）

2011年7月27日、九州大学大橋キャンパス
2011年8月23日、九州大学大橋キャンパス
2011年10月4日、九州大学大橋キャンパス
2011年11月25日、九州大学大橋キャンパス
2011年12月17日、九州大学大橋キャンパス
2012年1月31日、九州大学大橋キャンパス

(2)
西部支部研究会を以下のように催した。

会期 / 場所

平成23年12月17日（土）15:00～18:00
九州大学大橋キャンパス3号館2階322教室

研究発表

発表1：「小津安二郎『東京物語』における対立関係を彩る物音」
中村滋延会員（九州大学大学院 芸術工学研究院）

小津映画の代表作『東京物語』を構造分析し、そのサウンドトラックを構成する物音が構造をどのように彩っているかを明らかにし、これまでほとんど扱われたこのない物音の構造的機能の一端を示した。

発表2：「高齢者のリハビリテーションにおける起立・着席訓練支援ゲームの開発と評価」

藤岡 定氏（九州大学大学院 芸術工学研究院）

高齢者の体力維持のためにリハビリテーション現場で行われている起立・着席訓練は辛く退屈であるため、楽しんで訓練できるビデオゲーム形式の訓練を提案した。ゲームの開発と病院での臨床実験による評価を発表した。

なお、研究会後、総会及び懇親会を行った。

(3)
シンポジウム×映像上映「音と映像の現在形」を西部支部後援として催した。

会場 西南コミュニティーセンター

会期 2011年11月6日（日）～7日（月）

シンポジウム 7日（月）13:00-15:00

韓成南（映像作家・記号学研究）

中村滋延（作曲家・メディアアーティスト）

バップ・ジリア（アニメーション研究）

[司会] 栗原詩子（音楽学・映像学）

映像上映 6日12:00-17:00 7日10:00-16:00

韓成南・中村滋延・黒岩俊哉・早川貴泰・高山穰・松山豊・古田伸彦・森内暢・青木一生 他

以上です。

（なかむら しげのぶ／西部支部担当理事・九州大学芸術工学研究院）

中部支部

池側 隆之

日本映像学会中部支部 2011 年度第 3 回研究会報告

3月3日(土)午後1時から、中部支部2011年度第3回研究会を愛知淑徳大学・長久手キャンパスで開催した。研究会は2部構成で実施し、第1部では、立命館大学映像学部教授の大森康宏先生にお越しいただき、「映像をアーカイブすること～映像人類学から見たビジュアルアーカイブ」と題してご講演いただいた。また、恒例となった、中部エリアの大学学部生・院生による作品プレゼンテーションの場も設け、第2部として研究会を構成した。

第1部では、中部支部が2011年度のテーマとしてきた「アーカイブ」の議論(中部支部担当理事・和田伸一郎氏が会報157号で詳しく報告)の最後として、日本の映像人類学分野の発展に貢献してこられた大森先生をお招きして基調講演をしていただいた。映像人類学は、「民族誌」(エスノグラフィー)における記録手法の一つである映像(写真や映画・ビデオ)を文化人類学研究に積極的に応用するものであり、そこには、取材対象であるインフォーマントの行動分析などはもちろんのこと、民族誌映画などの制作研究も含まれる。大森先生は、自作を中心とした作品ダイジェストの上映を行いながら、30年以上におよぶこれまでの実践報告と同分野を巡る今後の展望などについてお話をされた。



通常、映像人類学的な研究プロセスは、まず取材対象となるコミュニティを限定し、そこに住まうインフォーマントの日常生活を撮影記録することから始まる。そこでは、人々と物との関わり合い、あるいは生活の様子などが記録されていく。次に撮影者は、素材を編集し、撮影工程で得られた視覚情報がある程度まとめることになる。そして、出来上がった映像を一度インフォーマントに提示することで、そこで意見交換の場が生じ、その中からさらなる人類学的探求のヒントを見いだすという。つまり、映像制作を経て研究テーマが明確化されるのである。大森先生は、「未知の状態から抽象概念を作り出すことが研究者の役割」とし、その工程に映像が寄与することを強調された。特に興味深いのは、収集される映像は「研究素材」と「表現素材」という二つの側面を同時に兼ね備えるという点である。映像の「作り手」の視座より研究的価値を素

材から見いだすというその特徴と、元来映像が持つ視覚伝達における特性をそれぞれ活かすことが映像人類学の本質として指摘され、「抽象概念の抽出」と「具体概念の提示」に作用する映像の役割について言及された。

また映像人類学を巡ってはこれまで、撮影者の「視点」により映像が記録されていることそのものがすでに客観性を欠き、研究的価値はないなどとして批判されることがしばしばあったという。しかし、大森先生は、インフォーマントへの洞察から見いだされるテーマの抽出に見られるように、「不確実性のせめぎ合いの中で僅かな確実／確信が生まれる」プロセスこそが重要と発言された。これは、近年マーケティングの分野でも注目を集めるエスノグラフィック・リサーチ(そもそもこれは文化人類学のエスノグラフィーを起源としている)の手法を思い起こさせる。つまり、統計学的に「客観性」を担保するこれまでの社会認識の在り方だけでなく、小さいコミュニティや個人に目を向けて彼らの視点から世界を見つめ直すことで、多数者の社会にはない、イノベティブな新しい価値創造へのシーズを見いだすという方法論が、当然ながら映像人類学の概念や目的にも近接しているという点が再確認される。人類学が芸術やデザインなどの分野と融合し始めた現代においては、改めて映像人類学的な視座を十分に理解し、「アーカイブ」の議論も含めその応用的可能性を検討する必要性が出てきているのではないかと、今回の講演会を通じて痛感した次第である。

第2部の学生作品プレゼンテーションでは、名古屋学芸大学、名古屋大学、静岡産業大学、椛山女学園大学、愛知淑徳大学、中京大学、名古屋市立大学(発表順)に所属する美術・デザイン・情報文化・情報工学系の学部生と院生が集まり、合計で21本の発表が行われた。今回で6回目となるこの企画では、これまでに倣って、各大学がおよそ20分の発表時間を使い自由にプレゼンテーションを行う、という形式を採用した。参加校の数が最多であった昨年と同数となったが、大学の顔ぶれが異なったということもあり、今回提示された映像が様々な教育実践の中から生まれたものであることを改めて確認することができた。特に、映像作品そのものの完成を主目的とする以外に、「○○のための映像」として発表されるケースが増えている印象があった。さらなる教育的効果を期待するのであれば、今後は大学ごとではなく、ジャンルごとにプレゼンテーションを行うことも検討してみる価値があるのではないかと感じられた。今回の発表者と作品リストは以下の通りである。

●名古屋学芸大学

borderland | 写真 | 岩田芽子 | メディア造形学部映像メディア学科

フォトゼミ 4年

光景 -borderland- | 写真 | 岩田芽子 | メディア造形学部映像メディア学科
フォトゼミ 4年

白蟲夢 | アニメーション | 5分00秒 | 南條沙歩 | メディア造形学部映像
メディア学科CGゼミ 4年

微熱 | アニメーション | 5分00秒 | 南條沙歩 | メディア造形学部映像
メディア学科CGゼミ 4年

●名古屋大学

建築物のファサードを使用した環境情報の視覚伝達 | 研究 | プーベッ
ト・ヴィタヤースック | 大学院情報科学研究科博士前期課程 2年

矢印の読み方——市民による地域活性のための文化活動 | 映像作品 |
39分00秒 | 渡辺悠平 | 大学院国際言語文化研究科博士前期課程 2年

●静岡産業大学

manifest dream | 映像作品 | 6分12秒 | 白井佐樹 | 情報学部情報デ
ザイン学科 4年

たいどうのはもん ~The ripple of signs~ | アニメーション | 6分00秒
| 望月翔太 | 情報学部情報デザイン学科 3年

●椋山女学園大学

おとだまの作り方 (ワークショップ映像化プロジェクト) | 映像作品 |
1分23秒 | 太田涼香 | 文化情報学部メディア情報専攻 2年

おとだまのあそびかた (ワークショップ映像化プロジェクト) | 映像作
品 | 1分23秒 | 太田涼香 | 文化情報学部メディア情報専攻 2年

ウルトラマリン | 映像作品 | 4分23秒 | 柴田千穂 | 文化情報学部メ
ディア情報専攻 3年

ハイヒール | 映像作品 | 20分00秒 | 神谷明奈 | 文化情報学部メデ
ィア情報専攻 4年

●愛知淑徳大学

ある晩の出来事。 | アニメーション | 42秒 | 宮田奈緒子 | メディアプ
ロデュース学部メディアプロデュース学科メディア表現コース 2年

次こそは… | アニメーション | 1分45秒 | 宮田奈緒子 | メディアプロ
デュース学部メディアプロデュース学科メディア表現コース 2年

ひみつのとびら | 映像作品 (ドラマ) | 9分28秒 | 鈴木琴恵 | 文化創
造学部文化創造学科表現文化専攻 3年

魔法の箱 | 映像作品 (PV) | 3分38秒 | 鈴木琴恵 | 文化創造学部文
化創造学科表現文化専攻 3年

●中京大学

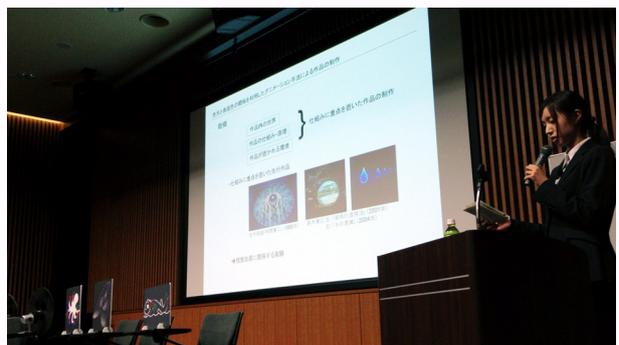
Music for Data Communication | インスタレーション, 及びパフォー
マンス | 大石桂誉 | 情報理工学部情報メディア工学科 4年

Fractal Sine Wave | アニメーション | 3分27秒 | 齋藤英晶 | 情報理
工学部情報メディア工学科 4年

tabula | インスタレーション | 竹内久生 | 大学院情報科学研究科メデ
ィア科学専攻修士課程 2年

Filters | インスタレーション | 二宮諒 | 大学院情報科学研究科メデ
ィア科学専攻修士課程 2年

●名古屋市立大学



色光の変化によるアニメーションの実験 | インスタレーション | 林朋子
| 芸術工学部デザイン情報学科 4年

* 作品時間はオリジナルの長さ

研究会は5時間にもおよび、65名の参加者と共に2011年度最後の
中部支部研究会は無事終了した。研究会の後には、会員や学生同士の交流
の場となるように愛知淑徳大学内のカフェテリアで懇親会を行った。プ
レゼンテーションの最中は十分に質疑の時間を設けることができなかつ
たので、学生らは積極的に意見交換を行い、さらには複数の教員に作品
講評をお願いする場面も見られた。中部支部ではこの学生プレゼンテー
ションを来年度も継続していきたいと考えている。

(いけがわ たかゆき / 中部支部担当理事・名古屋大学)

研究企画委員会報告

委員長 太田 曜

研究企画委員会が所管する研究会のひとつ、映像表現研究会では風間正委員のご尽力により、インターリンク：学生映像作品展 [ISMIE] 選抜作品の公開が実現しました。

以下をクリックしてご覧ください。

<http://www.youtube.com/user/ismie2012>
(YouTube で動画がみれます。)



編集後記

総務委員会

■ 1年前に編集後記を担当したとき、「3.11」の直後だった。あれ以来、さまざまな学会で、東日本を襲った大地震・大津波・原発事故をめぐる議論が行われた。科学の分野はもちろん、人文、芸術の分野でも。当映像学会では、大会がその前年から準備されていたので、大会会場（北海道大学）で災害自体がテーマとして議論されることはなかったが、私たちだれもが「揺れる大地・広がる放射能汚染」へ不安を抱えていたことはたしかだ。ここ1年、巨大災害をめぐる映像情報が無数に制作され、提供された。大きなテーマから身近なテーマまで。大きな媒体から小さな媒体まで。これらは「情報」として客観的資料や分析の対象となるにしても、当分のあいだは「感情」や「情緒」を伴う私たちの記憶の中に強く残り続け、生と死への問いを発し続けることだろう。(岩本憲児)

日本映像学会第38回大会 実行委員会からのお知らせ

3月12日に発表申込みを締め切りましたところ、研究発表44件、作品発表15件の合計59件の申込みをいただきました。多数のお申し込みをいただき、誠にありがとうございました。目下、実行委員会では、大会初日に開催予定の講演会およびシンポジウム等の大会企画の検討を進めております。詳細が決まり次第、ホームページ、メーリングリスト等で順次お知らせする予定です。

なお、宿泊につきましては、ご自身にてご手配なさるようお願い申し上げます。ホテルの多い福岡ですが、大会初日の週に医学系の学会が開催される模様です。混雑が予想されますので、お早めのご予約をお勧めいたします。

また、九州大学大橋キャンパスは、福岡空港からは、地下鉄、西鉄を乗り継いで約50分、タクシーをご利用の場合は約30分の交通の便のよい場所がございます。多数の会員の方々のご参加をお願いいたします。

実行委員長 中村滋延

